

# 郷土掬津 いにしえ通信

## 第52号 平成14年8月1日

発行 摂津市教育委員会 生涯学習課生涯学習課

〒566-8555 摂津市三島一丁目1-1

TEL (06) 6383-1111 TEL (0726) 38-0007

ホームページアドレス <http://www.city.selfan.asaka.jp/>



### 第5回 遊船(三十石船)4



**淀川三十石船歌** 船が動き出すと船頭が三十石船歌を洪い声で唄いはじめます。聴きほれて  
いると、乗合客がお国自慢や故郷の歌を唄い、にぎわいながら船は進みます。伏見・枚方・  
八軒屋など宿ごとにフシや歌詞が違ったようですが、ここでは枚方宿の系統の下りの際に唄  
った櫓こぎ歌のものを紹介します。

一隻の船頭は6人が標準で、各人が音頭・囃子を担当し  
あって様々な工夫があったようです。

イヤレサー 伏見下ればイナー  
淀とはいやじゃえ  
イヤレサー いやな小橋を臚下げに  
イヤレサー ヨイヨイヨー

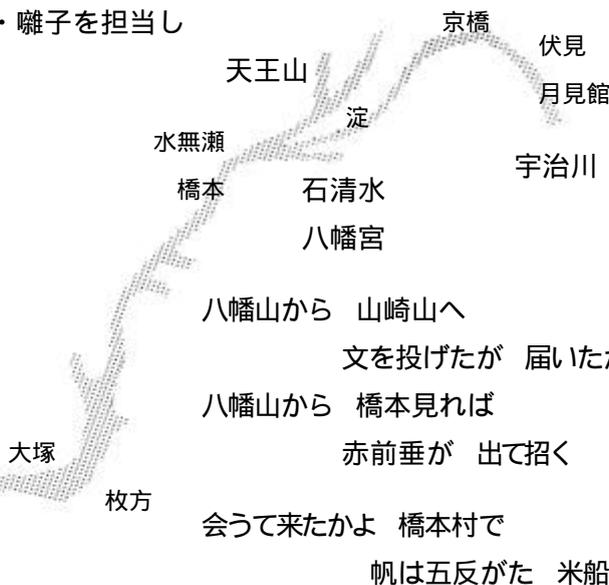
淀の上手の 千両の松は  
売らず買わずの見て千両

淀の上手の あの水車  
だれを待つやら くるくと

神崎川 一津屋  
江口  
守口

毛馬閘門  
桜宮  
天満橋

八軒屋 大坂城



ここは前島 お捨の墓じゃ いとも寂しい 波の音  
ここは大塚 榎の茶屋じゃ 向こは枚方 番所浦

ここはどこじゃと 船頭衆に問えば ここは枚方 鍵屋浦

鍵屋浦には 淀はいらぬ 三味や太鼓で 船とまる

ねぶたかるとて ねぶた目を覚ませよ ここは大坂の八軒屋じゃ



講座や展示のご案内、活動報告など多彩な文化財情報を毎月お知らせします。また、このページでは皆様の投稿を募集しています。

## 「三島路再発見」 ～むかし・むかしの話し～

大阪府・市町村生涯学習ネットワーク会議では、市町村が広域的に連携して地域の方々に学習の場を提供することになりました。三島地区では、本年度も多様な講師陣により連続講座を開催します。ぜひ、ご参加ください。

開催期間 10月22(火)～12月3日(火)

時 間 午後2時から4時

定 員 100人(各市町、それぞれ20人。申込み多数の場合は抽選)

対 象 島本町・高槻市・茨木市・吹田市・摂津市に在住・在勤・在学者で全5回の講座に参加できる方。

参加費用 保険加入料として300円(第1回開催日に徴収します。交通費は個人負担)

応募方法 往復ハガキに住所(在勤・在学の方は所在地も記入)、郵便番号、氏名、年齢、電話番号、返信用宛先を明記して下記まで郵送。9月20日(金)必着

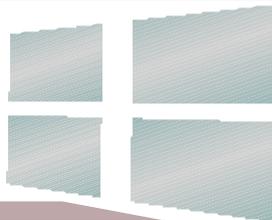
〒566-8555 摂津市三島一丁目1番1号 摂津市教育委員会 生涯学習課 宛

問合わせ 生涯学習課 (06)6383-1111・(0726)38-0007

日 程

| 開催日      | 学習内容                    | 講 師                     | 会 場                        |
|----------|-------------------------|-------------------------|----------------------------|
| 10/22(火) | 今城塚古墳<br>～八二ワの世界～       | 高槻市文化財課<br>職員 宮崎 康雄     | 今城塚古墳(雨天時:高槻市立今城塚公民館)      |
| 11/8(金)  | 考古学から見た<br>古代の茨木        | 京都府立大学<br>助教授 菱田 哲郎     | クリエイトセンター(茨木市市民総合センター・研修室) |
| 11/19(火) | 屋根瓦の考古学                 | 吹田市立博物館<br>参事 藤原 学      | メイシアター(吹田市文化会館・集会室)        |
| 11/26(火) | 発掘調査で分る中世の<br>まちなみと暮らし  | 摂津市生涯学習課<br>茗荷 充幸・伊部 貴雄 | 摂津市総合福祉会館<br>第1会議室         |
| 12/3(火)  | 天王山に銅がでる<br>幻の「峯山銅山」始末記 | 郷土史家<br>奥村 寛純           | 島本町ふれあいセンター<br>第4学習室       |

主 催 島本町人権文化部・高槻市・茨木市・摂津市・吹田市の各教育委員会  
および大阪府・市町村生涯学習ネットワーク会議



## 郷土史コーナー

### 三宅(みやけ)の歴史

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

#### 常楽寺跡(千里丘東1丁目)

常楽寺は天平年間(729~749)僧行基が嶋下郡佐井寺(現吹田市)に滞在中、瑞光の導きにより開いたと伝え、七堂伽藍を備えた大寺であったと伝えられています(「常楽寺縁起古木家文書」)。その後、三宅城城主三宅氏の菩提寺となりましたが、元和元年(1615)に焼失します。その後元禄13年(1700)再興されたといわれています。廃仏稀釈によって明治6年(1873)廃寺となりました。

旧境内は現在墓地となり、その中に三宅氏の墓碑とみられる宝篋印塔(ほうきょういんとう)があります。台座に「前羽劔大守要叟正三禅定門 永正八年七月二十四日」の刻銘があります。しかし前羽州大守が誰にあたるかは不明。ちなみに永正8年(1511)7月13日和泉深井(現堺市)における細川澄元細川高国の争いで、三宅氏らは高国方につき大敗しています(瓦林政頼記)。

慶応4年(1868)から明治5年までの諸事付込改写帳(古木家文書)によると常楽寺は宝光山と号し、真言宗高野山慈光院末で、三宅郷の鎮守井於神社(現茨木市)の別当寺であった。境内は東西40間、南北25間で寛永6年(1629)の検地のときには、境内釈迦堂跡は永荒として見捨て地でした。廃寺となったため本堂は井於神社の神楽堂、門は同社表門となりました。

「平凡社・大阪府の地名」より

担当 (茗荷)



移築された山門(井於神社)

宝篋印塔とは、塔の一種で、基礎と立方体に近い塔身、4隅に飾のある階段状の笠、相輪を積み上げたものが一般的です。インドのアショカ王の八万四撰塔造立の故事にならい中国越王銭弘俶が955年に宝篋印心呪経を納入して全国にわけた小塔に由来します。



三宅氏の墓碑とみられる宝篋印塔

## 第17回

埋もれた  
摂津市の歴史

発掘調査で明らかになっていく摂津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

## 平成9年度

## 千里丘2丁目試掘調査

石鏃について 石器には大きくわけて打製のものと磨製のものがあります。今回発見された石鏃はサヌカイトという石材を使用した打製のものです。サヌカイトという石は、黒色を呈する緻密な火成岩で、香川県屋島地方や近畿地方の二上山などで産出されます。この石は貝殻状に破碎する特色があり、打ち欠いただけで鋭利な面をもちナイフなど石器の材料として適しているといえます。石鏃は縄文時代に入るとつくられはじめ、弥生時代後期に鉄鏃が普及するようになるまで作られます。

石鏃は時代や地域によりさまざまな形があり、型式分類の研究が盛んに行われています。赤堀英三は基部の形状から有柄・無柄・柳葉形に分類し、山内清男は凹基・平基・斜基・円基と分類しました。最近では、香川県紫雲出山遺跡の石器資料から佐原真は尖基と円基をまとめて凸基とし、この形状に無茎・有茎を組み合わせで分類しています。

千里丘2丁目出土の石鏃は長さ3.65cm、幅は最大で2.2cm、厚さ0.5cm、重さは約3gです。この石鏃は上記の分類によると無茎の凸基式にあたります。この型式は、弥生時代中期の近畿地方に多く見られます。

弥生時代の石鏃について 石鏃は矢柄に装着され、矢として用います。縄文時代は主に狩猟用であったのに対し、弥生時代には戦闘用の武器としての性格が加わります。上記で石鏃の形態分類を行った佐原真は、縄文時代の石鏃が草創期以来、基本的に小さく（3cm未満）、軽く（2g未満）、薄い三角形であるのに対して、近畿を中心とする弥生時代後期の石鏃は、大きく（3cm以上）、重く（3g以上）、厚い凸基式であることから、狩猟用の道具からより殺傷能力の高い戦闘用の道具に変わっていったと指摘しています。弥生時代は、米づくりが伝わり、対外交流が活発になり、大きな政治的単位に統合されていく時代でもありました。このような背景から軍事的緊張が発生して武器崇拜、高地性集落などが見られるようになります。これら社会的背景から石器もその役割が変わっていったのです。今回、千里丘2丁目の試掘調査で出土した石鏃はその形態、大きさから武器として作られた石鏃のようです。 担当（伊部）



打製石器の石鏃